

◇25日の藤田説量パスト・ガバナーご母堂本葬に会長がご焼香に行って参りました。

◇地区協議会持参資料を会長・幹事・各委員長に配布しました。

ニコニコBOX:

馬場信彦君 (三条南クラブ) 6月5日は三条南の20周年です。兄弟クラブの北クラブさんの全員の登録をよろしくお願い申し上げます。

平原信行君 (三条クラブ) 三条ロータリークラブで台湾親善訪問に平松幹事さんに参加いただきありがとうございました。又中條さんにはこのたび当社を利用いただき感謝しております。

芦田義重君 吉川吉彦君の卓話はきっとユニークな話と思います。皆さん御期待下さい!!

吉川吉彦君 本日の卓話、皆様の御期待に答えられないと思いますがよろしく。

石川勝行君 今日はよい天気にもぐまれて長男の遠足も楽しいでしょう。いよいよゴールデンウィークです。晴れますように祈って。

佐藤義英君 連休は残念ながら休めそうにもありません。1日ぐらいいは休みたいです。本日は吉川さんの卓話期待いたします。

米山 奨学:

落合益夫君

卓 話: 「私のことパートⅠ」 吉川吉彦君



名前は今、いわれた通り吉川（キッカワ）でございます。やっと私の番がきまして、昨年の十月頃に私の番がくるはずだったのが何故か急きょ前一回転しましてとうとうこの半年のびたわけです。けれどもいずれはくる日なものですから覚悟はしておりましたけれどもきょうは耳栓してお聞き願いたいと思います。きょう題名は私のことパートⅠというふうに決めさせていただいたんですけれどもこれから2、3と続くということの意味なんですけれどもいつパートⅡがくるやらわかりませんが私の人生編、職業編というふうにこう振り分けて考えてみ

てお話ししてみたいと思います。私の人生経験の一つの始まりを今日はパートⅠというふうにつけさせていただいて過去において非常に秘密のベールに包まれている部分をきょうはじめて公開するわけなんです。まあそこら辺を非常に恥を全面にだしますけれども何分よろしく願いいたします。生まれは昭和22年8月8日ということで当会員の本間茂男さんと同年同月同日ということで非常に2人共縁起のいい日に生まれたなということで出会い頭にそういうことでお互きに肝胆相照ろしたわけです。生まれは下田村の萩堀という場所なんですけれどもこの場所においては先々代の祖母の時分から私は覚えがはっきりしているですけれども、それ以前は皆目ひもといいたことがないんで今更乍先祖はどなたやらということできぐってみたことは未だにありません。何故かといいますと先

代が余りにも立派な人だっただけに私がこういうざままで今日にあらしめるということはちょっと恥ずかしいような気もするんでどうかと思ひまして痛いものにさわらずというふうな口でおります。このクラブの中でも私共は非常に若輩の部類に入るわけですが、こういう場面で自分のことをお話するというのは非常に苦痛なものです。実際こういうふうに壇上に立ってお話するとこうベラベラ喋っているように思いますが、これは高校時代に演劇というクラブに入りまして練習したおかげが今、こういって実っているようなしだいです。いろんなその今までの経過の中でかいつまんでちょっとさわってみたいと思います。話は前後して支離滅裂なような感じもしますのでちょっとメモをとって参りましてあっちこっちとばないように整理したつもりなんですけれども、まず父親のプロフィールをちょっとふれて見たいと思います。親父は下田村の中野原という場所に生まれ育ちまして百姓の8人兄弟の一番末っ子ということで非常にその厄介者というふうな存在だったわけです。私のおじいちゃんの下田村の長沢の旧長沢村の議会の方で活躍する一方、農業又は金融関係の、今でいう金貸しですね、そういうことをやっていたという事を聞いているわけです。8人兄弟で一番末っ子ということは非常にこうきびしいその生活を強いられましてとにかく丁稚に出なさいということで取りあえず東京へ丁稚にでかけまして洋服の仕立て業ですね、そういう職業に就いたわけです。その当時は洋服というものは今ゼビオとか何やかという背広関係は非常に安く売られていますけれどもオーダーメイドであの時分は非常にいい所のおやじさん関係そういう取引先が非常にあったわけです。東京にかれこれそういった職業で20年間くらしていたわけです。そうこうする内に戦争が始まりまして兵隊にとられ、兵隊の役割が何だかといいますと食料部隊だったそうです。今で思えば私の職業がその時に始まったのかなということで思いを寄せているんですけれどもはからずもそういうふうなかつこうです。実家の方の農業の手伝いとかそういうものは一切なかったわけですが、東京の新宿東大久保という所に長いこと在住しましてその近隣の人やら何やら大分付き合いも広くやっていたわけですが、戦災にあひまして疎開したまま居付いてしまったと両親の実家に身をよせていたような状態です。その実家にやはり子供連れで母親と一緒にきたわけですが、その母親の元で両親の実家に嫁さんと子供をかかえて何も仕事がなく百姓仕事も全然出来ず何やってもろくな仕事ができないという風な恰好で非常に邪魔にされたような存在だったわけですね。その邪魔になったおかげで私共粉骨精神というそういう気持がそこでつちかわれたような感じもしますが、私の人生の始まりがそこら辺にただよっていたという事です。親父はそういうプロの職業人として一所懸命家業を作ったわけですが、いかにせん田舎、疎開した折にですね、都会のそういう当時の下田の田んぼの真中にですね看板をかかえて商売しようとしてもですね、非常に困難があったわけです。盆暮勘定というんですか、お勘定をもらうにも盆・暮というのが定説でありまして仕入れは洋服生地、仕入れは全て現金ということになっておりましてその資本力の問題がそこで非常にひびいたわけです。毎年毎年そうやって盆・暮必ず入れればいいんですけれども大体4分の1は踏み倒しがあったということで苦しんでおったような状態です。やはりその当時のだんな衆とかそういった方々の着るものを作るにつけて非常に破たんしてしまっただけというふうなことです。私の0歳からまあ10歳、10歳から20歳また30歳、40歳というふうな段階をへましてその10歳きざみに必らずや何か今までの人生の節目というんですか、そういうものが明らかにされる部分が出るわけなんです。その過去の〇歳から10歳までの間の物事といえはいわゆる母親にくっついてですね、両親の実家にでかけてですね働かせられた、とまず春は田植えから